

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 125 2023年6月9日発行



「今この地球に住んでいる私たちに明らかなのは、地上の平和がいかに壊れやすいものであるかということです。自分自身と友人、大切な人たち、地球上のすべての人々のために晴れ渡る空と安寧、未来への信頼、そして平和が訪れるよう祈りましょう」

ベラルーシ「ナデジダ」で行われた
チェルノブイリ37周年の集いにて

本文 p. 16



ウクライナ内分泌研究所 p. 2



ウクライナの家族 p. 2



ベラルーシの家族 p. 17

チェルノブイリ 37 年・福島 12 年救援イベント

中筋純 講演会 「チェルノブイリと福島 原発事故を後世にどう伝えていくか」

4月25日、中筋純さんの講演、未来の福島子ども基金（黒部信一）、チェルノブイリ子ども基金（佐々木真理）の報告をオンラインで行いました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

後援の「生活協同組合パルシステム東京」様には大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。講演会の動画は以下よりご覧いただけます（子ども基金のHP「最新情報」にもリンクがあります）。

<https://www.palsystem-tokyo.coop/report/113227/>

～～ 本号の目次 ～～

- p. 2 内分泌研究所／ウクライナの家族
- p. 3～5 ウクライナからの便り
- p. 6～13 中筋純氏 講演録
- p. 14 チェルノブイリ37周年現地から
- p. 15 「被災国ウクライナ・ベラルーシは今」

- p. 16 ベラルーシ子ども健康回復センター
「ナデジダ」
- p. 17 ベラルーシからの便り
- p. 18 チェルノブイリの歌声
- p. 18 募金・救援状況
- p. 20 事務局から

ウクライナ 内分泌研究所

内分泌研究所では、甲状腺の患者の手術と治療を行っています。子ども基金はこれまで医薬品や医療機器の支援を行っています。エウチロクス〔甲状腺ホルモン剤〕3,310箱（1箱100錠入り）が、昨年7月末に内分泌研究所に届けられました。薬の購入の手続きや納品の手配は、NGO「チェルノブイリの子どものたちの生存」が行いました。

甲状腺の手術を受けた患者の多くは放射性ヨウ素治療を受け、甲状腺ホルモン剤を服用し、定期検査を受けています。患者たちはこの薬を生涯にわたり、毎日服用する必要があります。患者たちにとって重要な薬を支援していただき大変感謝いたします。子ども基金の支援で購入した薬は、2023年5月25日の時点で822人の甲状腺の患者が2466箱を受け取っています。数か月後には在庫がなくなる予定です。今後も私たちの協力関係が続くことを願っています。 所長 N・トロンコ

子ども基金は、6月～7月の間に、この薬の購入費用を送金する予定です。

下の写真は薬を受け取るユリヤさん（1996年生まれ）と看護師長オクサーナさん。ユリヤさんは2011年、14歳のとき学校の定期検査で病気が発見され、内分泌研究所で甲状腺の手術を受けました。放射性ヨウ素治療を受け、その後は年に2度検査を受けています。2022年春、キエフ（キーウ）近郊で激しい戦闘が続いていた時、彼女はずっとキエフ市の自宅で過ごしていました。戦争の影響で品物が不足し、薬局で必要な薬を買うことも難しかったと言います。彼女は甲状腺の手術後、今まで一度も保養施設などに行ったことはないそうです。



ウクライナの家族

◆ヴラッド（2004年生まれ）ジトーミル州ナロジチ 先天性心疾患、肺動脈狭窄症のほか多数の病気がある。子どもの頃から心臓、口唇口蓋裂など多くの手術を受けてきた。今年に入ってからキエフの病院で耳の治療を2回受けた。3回目は数か月後に行われる予定。ヴラッドの障害者年金額は2100フリブニャ（約57ドル）だが、ひと月にかかる医薬品代は4700フリブニャ（約128ドル）。音楽学校のピアノ科を卒業した。5月27日にオブルチ（ジトーミル州）の町で行われる、ウクライナ軍兵士のためのチャリティーコンサートで演奏することになっている。また2か月前から教会の合唱団に入って歌っている。母親は年金生活者。甲状腺の病気がある。父親は5か月前に脳出血を起こし、現在リハビリ治療中。仕事を続けられなくなり、障害者年金受給の手続きをしている。



※表紙に掲載の写真はヴラッド君と母親。昨年夏にナロジチ近郊のひまわり畑にて。



母親とボグダナさん

◆ボグダナ（2002年生まれ）

先天性大脳発達障害。寝たきりの状態で、常に母親の介護が必要。母子家庭。戦争が始まってから母と共に、トルコに住んでいる姉の家に避難した。戦争が終わるまでは、故郷のナロジチに帰ることは考えていないという。

間もなくこの家族を含むウクライナの8家族へ支援金を送金します。

★5月9日、オブルチ市立病院に医療用ライトが届きました。詳細は次号で報告します。

※表紙に掲載の写真は内分泌研究所の医師タチャナさんと、チェルニゴフ州に住んでいるユリヤさん（1993年生まれ）。2017年に転移のある甲状腺がんの手術を受け、その後は甲状腺ホルモン剤を服用しています。

4 月～5 月に届いたウクライナの人たちからの手紙を紹介します。自分と家族の病気に苦しむ人、ロシアの支配地域となっている町で治療の機会を失ってしまっている人、避難先の国外からウクライナ支援を続けている人たちがいます。最初に紹介する 3 人の女性はそれぞれ 30 代半ばで、子どもの頃に甲状腺の手術を受け、子ども基金の保養プロジェクトに参加しました。

* * * * * オリガ (ジトーミル)

4 月 29 日

昨日はとても大変な日でした。人々はみな、夜中にウマニとウクライナ各地が攻撃されたことについて話していました。言葉にすることができないほどひどい状況で、私は涙が止まりませんでした。そして夜にはまた空襲警報が…。私たちの家の隣には工場があります。そこから流れる空襲警報の轟音は直接窓に響いてきます。1 年以上過ぎててもこの恐ろしく、けたたましい音に慣れることができません。

私には軍医の友人がいます。彼の妻と電話で話をしました。「夫は今のようないやな状況に耐える心の準備ができていなかった」と言います。親しい友人の遺体を拾い集める、それも文字通り、ずたずたに引き裂かれたような遺体を集めるというような経験をすることになるとは…。想像することさえ恐ろしいです。彼は精神的に押し潰されていて、いつも泣いているそうです。戦場で毎日、死を見ているのです。

私自身にも闘いがあります。夫が再度 COVID19 に感染し、免疫がひどい暴走を起こしました。昨日、知らされた検査結果はとても悪かったです。医師は、コロナウイルスの影響がどのように現れるのかわからないと言います。夫はホルモン剤やその他の薬をたくさん服用しています。その薬代のために稼がなければならない、仕事に全力を注いでいるため、体が疲れ切っています。またホルモン剤の影響でひどく太りました。薬は高額で、それもいつも効果があるとは限りません。

私自身も精神的な原因のためか体調を崩してしまいました。でもなんとか自分をしっかり保とうとしています。ただ、今の私の状況を職場の同僚たちは理解してくれません。私は夫の介護をする必要があります、仕事に大きく時間を割くことができないのですが、このことに理解が得られません。

夫の障がい者認定の申請をしましたが、それは全く思うようにいきませんでした。あまりにも多くの

病気があり、医師は一体どの診断をもって進めたらよいのかわかりませんでした。半年間、何も手続きがされないまま放っておかれました。それで私は病院の院長に相談に行きました。そうしたらその後からすぐに、夫のことに注意を向けてもらえるようになったのです。

恐らく私はこの間の恐ろしいすべてのことのせいで、何歳か一度に年を取ってしまったような気がします。でも私たちの人生との闘いをあきらめずに、これからも続けていきます。

自然の中を歩くことだけが、私を救ってくれます。美しい自然のおかげで、私は心の平穏を取り戻すことができます。

5 月 1 日

チェルノブイリ子ども基金のみなさんに心の底から感謝しています。私と家族にとって人生のこのような困難な時に、遠い日本の友人のみなさんからご支援をいただけるなんて、考えてもいませんでした。涙が自然にあふれてきます。感謝の気持ちでいっぱいです。

◆本人、夫とも大変厳しい状況にあるため、2022 年 9 月に続き、5 月 1 日に支援金を送りました。その後、オリガさん自身も体調が悪化し肺炎になってしまいました。「一番必要な時に夫と自分の薬を一番必要な時に買うことができました。ありがとうございます」と連絡がありました。

* * * * *

ユーリヤ (ドネツク市)

ドネツク市は 2014 年からロシア側支配地域にあります。

4 月 8 日

春になって、私はまた体調に問題が起きています。昨日、血圧が 220/130 まで上がりました。発作のために、ここ数日間は立ち上がることも、家の中を歩くこともほとんどありません。

私と同様に、甲状腺と両方の副腎を摘出した人たちの Facebook のグループに登録しました。多くの人が登録していますが、彼らは私のように発作に悩まされていません。私はキエフ（キーウ）の病院で手術を受けられませんでした。残念です。ロシアのペテルブルグの病院に、この病気の専門医がいます。そこで手術を受けることもできましたが、体調の悪化と、さらに戦争のため、今は家から出ることもできません。

ここドネツクでは少し前、冬が戻ってきたような寒さでした。雪が降っていた数日間、体調が悪化しました。3 日間ベッドから起き上がることもできないほどでした。天候の変化は私にとってとても危険です。今はもう雪も溶け、外は暖かくなってきています。天候が安定して、せめて庭先の椅子に座ることができるようなれたらと思います。

この数か月間は戦闘が少なく、私たちは窓の向こうの静けさに慣れていました。でも数日前、また銃声が始まり、不安が戻ってきました。今朝、町の中心で、久しぶりに飛来（爆撃）がありました。

木々が緑に覆われる頃、また戦闘が活発になるだろうと言われています。武器が木々に隠されるので、戦闘には都合がよいのだと…。だから、春、そして夏がくるのを恐れています。体調がよくなることを、戦争が終わることを、早く平和が訪れることを願っています。

4月17日

私の手元にはチロキシン【甲状腺ホルモン剤】と他の薬もあります。薬局には薬がありますが、その品質についてはわかりません。私は体調がとても悪くて、薬の量を変えてみても何の効果もありません。それが薬のせいなのか、それともこの病気はもうどうすることもできないのか、わかりません。これまでになかった新たな症状がいくつか現れたのですが、どう対処したらよいのか、誰にも相談することができません。ドネツクにはこの病気の専門医がいないのです。ここでは医師も看護師も、私のためにできることが何もないのです。ただ血液検査のために看護師に採血に来てもらい、それを父が血液分析センターへ持っていきます。でもその結果を知ってから

どうするかは、自分自身で決めなくてはなりません。

電気については問題ありません。でもお湯は全く出ません。去年は水が全く出ませんでしたので、氷を溶かして、ろ過して使っていました。今年は3日に一度、19 時～21 時に水が出ます。その水はあまりきれいではなく、毎回違った色です。でもそれを沸騰させて、食器を洗ったり、体を洗ったりするのに使います。料理に使ったり飲んだりする水は、店で買っています。

一体、いつになったら体調がよくなるのかわかりません。毎日の発作に疲れました。でもこれからもこうして文通できることをとても望んでいます。

4月21日

やっとなり少し体調がよくなったので連絡をしています。まだ家の中を自由に歩き回ることはできませんが、食卓につけるようになりました。他の部屋に移ると、そこですぐに座ってしまいます。自分で動ける自由が少なくなっていて、少し恐ろしく感じます。いつか、私の病気を理解し、手術をしてもらえる病院を探したいです。

4月30日

私は無事ですが、この数日、町は危険でした。町の中心と、その後他の地区でも攻撃があり、亡くなった人もいます。大きな建物、個人の住宅、行政機関の近くの公園も爆撃されました。私が通っていた大学のある通りで、乗り合いバスに乗っていた運転手、8 歳の子どもも亡くなりました…。

私たちが思っていた通り、木々が緑に色づくようになって、危険になってきました。

5月4日

甲状腺ホルモン検査の結果、私は多くの量のホルモン剤を服用していたことがわかり、0.25 mg を減らせることになりました。これは血圧の問題を少し緩和するはずなのでとても嬉しかったのです。でも少量にして1週間過ぎてもまだ効果が現れません。母が言うには、私は長い間病気をしているので、回復にも時間がかかるのではないかと。

5月10日

薬の服用量を減らしても効果がありません。それどころか発作の回数も増えて、強まっているように

感じます。日中はとても疲れるし、夜も眠れません。3月から3キロほど痩せてしまいました。他に一体何をすればよくなるのかわかりません。

今年の4月26日は、戦争中で危険なのでチェルノブイリの集会はなかったのではないかと思います。ここドネツクは、キエフやその周辺の州に比べてチェルノブイリの犠牲者はそれほど多くありません(※)。それでも2014年までは、この町にもチェルノブイリ団体がありました。団体の代表だった女性は、2014年マイダン革命の後、障がいのある自分の娘を連れてどこか別の町へ行きました。それ以来何の連絡もありませんので、恐らくドネツクには戻ってきていないのでしょう。2017年～2019年には、町の中央通りでチェルノブイリの写真展があったことを覚えています。その後パンデミックが始まり、2021年には私はもう体調がとても悪くなり、外出しなくなりましたので、チェルノブイリのイベントがあったのかどうかわかりません。

◆子ども基金が支援した甲状腺がんの子どものうち、ドネツクにはユーリヤさんの他、もう一人ミーシャさん(男性。1981年生まれ)がいましたが、がんの転移のため2012年に31歳で亡くなっています。父親のワレンチンさんは2013年夏に来日し、講演を行いました。

◆2017年、子ども基金はユーリヤさんに医薬品購入のための支援金を送りました。しかし今は日本からドネツクへの送金ができません。

オクサーナ(ジトーミル出身)

**キエフ(キーウ)からチェコ経由でイギリスに避難
3月23日**

英語学習コースの修了証がもらえました。火曜日にはイギリスの教育システムについてのコースも終了します。いま仕事を探しているところです。ダービー大学でウクライナ避難民を紹介する展示がありました。そこには私の写真と紹介もありました。

4月23日

今は新たな受け入れ家族のもとで暮らしています。最初の家族も6か月間とてもよくしてくれました。

ノッティンガムで活動をしているイギリスのNGOでボランティアをしています。このNGOでは私のようなウクライナ避難民に支援物資を渡し、生活の支

援もしています。私はこのNGOにとっても助けられています。また、大型トラックでウクライナに支援物資を届けています。最近、パフムートに様々な支援物資と、自動車、救急車も運びました。

子ども基金の皆さんがウクライナの人たちの支援を続けていることにとても感謝しています。それはとても尊いことです。



トラックの荷詰め作業を手伝っているオクサーナさん

サビーナ(スラヴチチ出身)スペインへ避難

生まれつき股関節の変形があり、足が不自由で、子どもの頃から何度も外科手術を受けていました。何回目かの手術後の傷口が癒えない中、同じ町の仲間たちと共に避難をしました(22年6月発行ニュース122号参照)。

5月8日

これまで赤十字の支援を受けたり、避難民同士で助け合ったりしながら暮らしています。健康状態は良好です。この町でよい整形外科を見つけ、整形用の靴を作りました。いまITの仕事に活かすために人工知能について詳しく勉強しているところです。



ウクライナから一緒に連れてきた猫と

◆サビーナさんと電話で話すことができました。ちょうどスラヴチチから母親が会いに来ていたところで、二人の声は明るく穏やかでした。送られてきた写真の彼女は以前よりふっくらしていて、子どもの頃に会った時の表情でした。母親は仕事のためにウクライナに戻るそうですが、サビーナさんは残ってほしいと言っていました。

■コンセントの向こう側

福島原発事故は、東京電力から東京および関東一帯に電力を供給していた、その大元が破綻してしまったということ。我々が普段使っているコンセントの向こうって、一体どこにつながっているのか？そういう意識もどんどん薄れてきている。せめて電気を使う我々は、その向こう側に何かがあるのかということを、常に考えながら生きていたいなということで、こういうテーマでずっと撮影をしています。

そもそもチェルノブイリには産業遺構として記録したいということで行きました。軍艦島とかそういった場所を撮影してきたのですが、正直日本のそういった場所をすべて撮りつくして、まず候補に挙がったのは「チェルノブイリ原発はどうなっているのか」ということでした。僕がちょうど 20 歳、大学 2 年生の時に起きた事故でした。世の中では、お母さんたちが食材を選んだり、ミュージシャンたちがチェルノブイリ原発の歌を歌っていたことなどは心の中には残っていたのですが、なかなか実感がわかない。しかも私は大学の文化人類学のゼミでチェルノブイリ原発を題材にしたディベートなどもやっていたのですが、卒業してからそういった機会に触れることがありませんでした。

原発から約 4 キロぐらい離れたところに約 4 万 5 千人が住んでいたプリピャチという原発都市があるのですが、16 階建ての廃屋のところから、この街を眺め、ちょうど地平線の奥におへそのように発電所が飛び出している風景を見たときに、産業遺構としてもとてつもないテーマを持っているなど、これは取り組むには長い時間がかかるかもしれないと思いました。それと同時に学生のときに、原子力というものが世界中の闇の部分だとか、化石燃料がそもそもオーストラリアのアボリジニの村の金の山から持ってこられた話とか、人類学担当の教官がおっしゃっていたことから核と人間との関わり、先進国と発展途上国とのゆがんだ関係（当時南北問題と称していた）、そういった

ことを力説されていたことを思い出し、取り組んでいこうと、通うようになりました。

■いまだに高線量のチェルノブイリ

主に取り残された街の写真などを撮ったわけですが、回を重ねるごとに現地のガイドと共同でプリピャチ市の中をいろいろ調べることになりました。いま写っているのがプリピャチ市の中央病院という地下室にある 1 か所です。何だか靴のようなものが映っています。この中央病院の地下室に、1986 年の事故後すぐにレスキューに駆けつけた消防士の消防服が放り込まれているという噂があるから、それを検証に行こうということで、線量計をもって調査に行きました。チェルノブイリ事故のとき、たくさんの消防士が緊急招集されました。原発付きの消防士は防護の講習とか受けて、鉛の防護服などの装備があったのですが、かき集められたプリピャチ市の消防隊やチェルノブイリ市の消防隊員たちはたいした防護知識もないまま特攻隊のように消火活動に当たったと言われています。次々と屋根の上から放水したり、散らばったがれきを炉内に戻すという作業をやっていたわけですが、当然高線量の被曝をします。これは 2012 年に撮影したもので、靴の先にあてた線量計です。僕も帰ってきて写真の画像をクローズアップしてびっくりしました。事故から 26 年たってもまだこの靴の先から 1.3 ミリシーベルトも出ているということに背筋が寒くなりました。

なぜここに服が放り込まれているかというと、初期消火に当たった人が次々と倒れていく、病院に運ばれる、その着ている消防服の表面を線量調査するととんでもない数値が出ている。とにかく一回脱がしてどこかにまとめて廃棄しろという医師からの指示があって、それで選ばれたのが中央病院の地下室で、それ以来封印された形になったのです。プリピャチ市というのはもう翌日に退去命令が出て、市内はもぬけの殻になったと言われています。

■サマシオール

さらにプリピャチ市の取材から周辺に行くとサマシオールと呼ばれる人たちが住んでいます。この写真は巡回展の中で象徴として使っています。今もチェルノブイリ原発からの約 30 キロ圏内は全員が避難して、立ち入り禁止区域になっていて、特別の許可がないと鉄条網の中には入れないことになっていますが、事故からしばらくして慣れない都会の生活に嫌気がさして自分の住んでいた小さな村に次から次へと人が帰ってくる。サマシオールは、現地の言葉で「わがままな人」という意味があるそうです。「自由な人」という人もいます。プリピャチ市という、先ほどお見せした団地の街の方は戻ることは不可能です。

こういう人たちが何故自分の故郷に帰ったかという、いわゆる生活の基本的なインフラというのが全て周辺の自然で賄える。少量の裸電球が照らせる電力があれば、薪は周辺の山から採ってきて、掘れば泉が出て、周りはすべて畑、薬はいろんな薬草が植えているから大丈夫、といった暮らしをしている。このおばあさんの、立派な足が大地にがっちり踏みしめて立っている姿を見て、非常に不思議な感じがしました。鉄条網で被われた 30 キロの中でこういう極めて人間のプリミティブ(根源的)な部分の生き方をされている人と、ソビエト国家に明かりをともそうと巨大なプロジェクトで作ったチェルノブイリ原発の壊れた原子炉というのが共存しているわけです。ここに連れて行ってくれたドライバーのセルゲイさんはこの 30 キロゾーンのすぐはずれの所に住んでいます。この原発の建屋のことを指さして「太ったものは油を欲しがると。太ったものというのは、おそらく原子力発電所のことを言っているのですが、近代が追い求めてきた人間の無限の欲求のことを指しているのだと思います。次から次へと自分の欲を満たすためにいろんなものを消費し続け、それが最終的には破綻するという意味合いで、日本のことわ



ざ「足るを知る」「知足」というような言葉とシンクロするのではないかと思います。

■地球という生命体の大きな循環

プリピャチ市の街の中です。20 数年開かなかった扉をセルゲイさんが蹴り開けたところ、その瞬間にこういう風景が飛び込んできました。一面のコケの所にキノコがスーッと生えている、これはひょっとしたら、僕らが地学で勉強した、地球が誕生して生命がようやく生まれ始めたころ

の地球の姿なんじゃないかなと。核汚染されてしまったチェルノブイリの大地ってものを原始の形態の生命が覆って行って、また一つのスタートのような、そういった空間に見えました。福島原発事故、チェルノブイリもそうですが、コケやキノコが非常に多くの放射能を吸うと言われます。今も福島の山中、福島だけじゃないですね、関東近辺の山中のキノコ、山菜でいうとコシアブラ、そういったものというのは高濃度に汚染されています。でも汚染されてるとするのは僕ら食べる側からの意識です。よくよく考えれば、キノコや山菜のコシアブラなどが放射能を吸収してくれることで他の動物が住めるようにしてくれている。この姿を見たときに、地球という生命体の大きな循環の流れの第一歩みたいな感じがしました。

そういった核というのを地球の歴史とオーバーラップして考えるようになり、福島にも浜通り、中通り含めて、震災のときから気がついてから 12 年、頻繁に足を運ぶようになりました。福島原発というのは、ちょうど福島県の浜通りと呼ばれる所、太平洋に面している海のそばにあります。

福島の人たちに言わせると浜通りというのは、「福島のチベット」なのだ。海があるから僕としてはちょっと別の印象がありますが、チベット扱いされるというのはどこことなく僕のふるさととの和歌山とよく似ているなと思います。故郷の和歌山もかつては関西電力の原発銀座になる予定でしたので、歴史が変わっていたら、ひょっとしたら僕

の故郷の姿なんじゃないかといつも感じながら取材をしています。

先程の地球の歴史の話ですが、この太陽が昇るシーンをぜひ撮りたいと思いました。この辺り手前に壊れた原子炉があり、ちょうど5月の10日から20日ぐらいの間に、それとシンクロするような形で水平線から太陽が昇ってきます。まだ5月とはいえ日が昇る前はものすごく気温が下がりますが、太陽が顔を出した途端、温もりが身体を射抜きます。太陽とは実は核融合のエネルギーですね。核と人間は共存が出来ないというふうに言われてるのですが、この身体が温くなる瞬間に、実は我々は核融合の恩恵をすごく受けていると気がつきます。でもその前にひざまづいている4基の原発を改めて見ると、核の領域というのは宇宙、神のみぞが取り扱えるものであって、我々人間がたやすく触るものではないんだよと。このシルエットになった4つの原発が、太陽に向けてお詫びを入れているような姿にも思えます。

■東京オリンピック誘致～アンダーコントロール

福島に、浜通りの被災地に通わねばダメだなと思った直接のきっかけは、東京オリンピックが誘致されるということでした。

ブエノスアイレスで安倍元首相が、ボードに出ているようなセリフをおっしゃいました【「何人かの方は福島にご懸念をお持ちです。ここで保証いたします。事態は制御下にあります。そして、今もこれからも、東京への被害はありません」と書かれているニュース画像】。アンダーコントロールとよく言われます。詩人のアーサー・ピナードさんが実はこのセリフに面白い解釈を与えています。制御下というのは福島原発だけを指すのではない。事態は制御下にあるということは、国民の意識だとか報道する体制、本当のことを知らせるような体制、そういったものも全て我々は掌握しているから問題ない、オリンピックを開催するまで福島原発事故というのは、本当は収束していなくても収束させたようにしよう。そういった暗喩が込められていると、彼は分析しています。僕はその通りだと思います。

■「明るい未来のエネルギー」看板を撤去

これは双葉町の玄関口にあった、有名な原子力のPR看板「明るい未来のエネルギー」。今はこのアーチ状の看板もすべて外されてしまいました。98年に双葉町が電源三法の予算（交付金）が減ってきたので新しく原発を増設してくれと、その願いを込めて町に作ったという、いわゆる原子力の城下町の顔のような看板でした。このキャッチコピーはここともう一か所の合計4つ募集したのですが、この6号線に面した1番の所というのは小学校の宿題として出たということです。当時小学生だった大沼勇治さんがこのキャッチコピーを考え優秀賞に選ばれました。事故の後、この看板がものすごくクローズアップされて誹謗中傷の対象になってしまった。そういったこともあり、彼は自分が町と生きてゆくと決心した。しかも奥さんが身重のときに原発の事故が起きて、いざ原発事故が起きると受け入れ先もなく路頭に迷いそうになりながら、ようやく名古屋の方で落ち着いた。彼は何でこのコピーを作ったのかと自責の念を感じて、このコピーをモチーフにして、もう原発は止めようということをずっと発信されていました。

ついにこの看板が最後になるというとき、一部始終をずっと撮っていました。看板の文字盤が、簡単に外せるアクリルの活字盤になっているのですが、この「未来」という2文字だけが上下のステンレスのレールに付着してしまい、なかなか取れない。しばらくずっと付着した状態が続いて、ついに最後はバールで剥がされる。この様子を見て、ここの未来というのは果たしてどうなるのか、未来を取れなかったのはひょっとしたら縄文時代から多くの人たちが歴史を作ってきた眠ってる人たちが、おれたちの未来をどうしてくれる、いろんな見えざる手が、未来の2文字を押さえているんじゃないかなと。ただそういう貴重な証言者が次から次へと姿を消してゆきます。

■見えなくなる福島原発と中間貯蔵施設

福島原発というのはなかなか姿が見えないのです。第一原発は。国道6号線の長者ヶ原というところを走るときに一瞬排気塔が見えます。広大な田畑というのが、いま福島中の除去土壌を運ぶた

めの中間貯蔵施設と姿を変えています。中間貯蔵施設がどういう姿なのか。人の生活圏と原発の距離はどれくらいなのか。非常によく学べるフィールドワークが出来る場所だったのですが、なんと手前に土手を作ってしまう、その上に植栽をしてしまった。これは中間貯蔵施設、原発というのを見えるところから見ないでくださいという。今、国道 6 号線の海沿い大熊町、双葉町というのは中間貯蔵の施設になっていますが、隙あれば植栽がされているか土盛りがされているか、そういった状況になっています。なかなか本物を、ほんとに起きていることを見せたくないというお上の意図が非常によくわかったと思います。

原発の事故というのは 12 年たってももちろん何も解決していません。長く携わることで、いろんな見せ方ができるようになってきました。今の中間貯蔵施設もそうですが、一つはずっと定点で撮っていくという手法で、7、8 年くらいやっています。例えば、これは 1 年前に撮った大熊町の幼稚園です。園庭に咲いている桜の木が非常にユニークな形をしていて、ここの幼稚園が避難所になっていたということもあり、外の風景を桜の時期にぱっと撮りました【幼稚園の建物の横の桜の木】。今年行くとこういう姿になっています【更地に立っている桜の木】。今、復興ということで町がどんどん避難指示が解除されました。解除されるということはということかと言いますと、いわゆる町の姿の解体とセットになっています。かつての町の姿はどんどん姿を消して行って、この木だけがモニュメントのように残っている。こちらは富岡町の第 2 小学校の体育館の前の桜です。ここも避難指示が解除されて、学校も統合されて、学校の本体も解体され、体育館は若干リニューアルされたが、老木の桜は消えてしまいました。富岡町というのは桜で非常に有名な所で、つつい桜に目がいってしまいます。

町の解体というのが 2017 年ぐらいからずっと始まって、各地更地になった所に、このような解体済み標識というのが立てられるようになりました。僕はずっとこれを「墓標」と呼んでいました。解体というのは環境省がやりだした国策の一つで、

いわゆる原発事故で放射能を浴びてしまった家屋というのが長期間放置されて、大規模な修理改善をしなくては帰還が出来ないという状況になった。震災後 6 年経ってしまったら屋根などが崩壊しているし、家の中が無茶苦茶な状態になっている。定めた期間のうちに自宅の解体申請を環境省に出した場合は無料でやりますよ、と。でも地元の人たちは、なかなか踏ん切りがつかない。ここを無くしてしまうと避難先と地元をつなぐ形が無くなってしまふからと、躊躇してしまう人が多かったのですが、いざ申込の期間を過ぎてしまうと、自分で家を解体となった場合、その解体のがれきなどの廃材というのは通常の産業廃棄物では処分できなくなってしまう、放射能を帯びている特定廃棄物ということで費用が 2~4 倍と、ものすごい額になってくる。その借金とかを次の代に残したくないということで苦渋の決断で解体の決断をするという人たちが多々いらっしゃいました。その影響で前の町の姿がほぼ無くなって、更地の町が広がっています。今、スタディーツアーに来られた方が、更地の町を廻っても、なかなか実感がつかみにくいことがあります。でも過去に撮った写真が残っていれば、学びが深くなるのじゃないかなという感じで、写真が持つ記録性の力というものを今、改めて感じているところです。

■田園地帯がソーラーパネルに

田畑も同じく放射能汚染され、その後、雑草の畑になっていたところに、国が入ると恐ろしいことやりますね、一気に重機を入れて、表面の土 5 センチをはぎ取って、新しい土を入れて、さあ営農再開だというのですが、もうそれですでに 10 年近くたっているわけです。もし検出放射能がゼロでも買い叩かれて、大手の肉食産業とかに安い値段で買われていってしまうコメを作るのか。コメ作りは地域の共同作業ですから、将来、土地の有効活用はどうしたらいいのか？やはりソーラーをやるしかないだろうと。あるときに一気に田んぼに「墓標」が立ち始めました。この姿にアメリカの戦没者用の墓地のアーリントンの墓地の十字架を思い出します。気がつけば先代の墓もこういうソーラーに囲まれてしまった。一面黄金の波に揺れ

ていた浪江町の一番きれいな田園地帯を 20 年間はソーラーが埋めてしまう。しかもソーラーで出来た電気が地元の浪江町を照らしているのかと思いきや、それがまた阿武隈の山脈を越えて、中央幹線に乗って東京の燈になっているということで、この関東で使っている電気も、この浪江町の無念の田んぼの集めた光が電気になっている。これはまさしくコンセントの向こう側の現状です。発電の方法が変わってもエネルギーを供給する側と消費する側との関係というのは、全く変わってないということをまざまざと感じます。

■ドローン撮影で俯瞰する視線

今まではずっと地に足がついている所で撮らないと写真じゃないと思っていたのですが、最近小型のドローンを買ひ、よくドローンステールを撮っています。この写真（右下）は毎年 4 月の桜のシーズンになるとニュースになる福島県の夜ノ森の桜並木ですが、俯瞰して見るところがたくさんあります。この桜並木のところはお祭り騒ぎですよ。よさこいや、いろんな催しものがある。桜並木だけをクローズアップして撮れば、もうそれこそ復興の春がやってきたと思うのですが、ちょっと鳥の目線になってみると、歯抜けだらけの町に桜並木だけが賑わっている。当然、桜の花の時期が終わったらみなさん来ませんから、あとはどういう状況になるかと。この夜ノ森地区も 4 月 1 日に避難指示が解除になって住めるようになりましたが、商店もインフラも何もありませんので、空き家と更地ばかりの非常にさみしい地区になっていることは、やはりクローズアップだけではなかなか見えない。俯瞰する視線というのは、今の福島の復興の状況をきっちり見るには一番適しているのではないかと感じています。

尊敬する方に一人宮本常一さんという民俗学者の方がいらっしゃるのですが、宮本さんもよく大学の講演をはじめ著書の中で、俯瞰してみる視点の大事さというのを言われる。『空からの民俗学』という本があるくらいです。現地に行くと一番高いところに行って、その土地の状況を見るわけです。集落に行っても一番高いやぐらのところとかお寺さんなどに登って、その集落の成り立ち

を見て、ここはどういった暮らしをやってきたのかとか、中央とどういった関りをしているのか推測する。そういうことで一つの民俗学が生まれてくるとおしゃっています。福島のドローンの目線というのも、地方と中央の関りを写してくれたりとか、復興の段階がどういうフェーズにきているとか、桜並木を作った明治時代の半谷清寿さんという政治家が、東の太陽とつながるラインに桜並木を作ってこの地の発展を願ったんじゃないかなとか、そういう歴史のロマンを考えたりもできます。

さらに「コンセントの向こう側」という大きな俯瞰する視線にもものすごく示唆を与えてくれます。とにかく高いところから見て、そこの暮らしがどうなっているとか、さらにそこと電力を享受していたところとどういつながりがあったのかとか。そういったものを可視化していければと思います。

もう一度見ていただきますと【明るい夜の渋谷の町の写真】、僕は震災当日、渋谷で撮影をしていました。それで渋谷の街というのが、そのあと浜通りを撮影するにあたって、1 つのグランドゼロのような風景になったわけです。この明るい未来のエネルギーの奥にあるこの点滅する赤信号と、最初に出てきた渋谷のスクランブル交差点のこの赤信号。この 2 つがものすごくシンクロするように見えて、そこをつなぐひとつのラインというか、座標軸ということで高圧電線がある。そういったものをなんとか可視化して、全てを忘れ去られようとしている被災地から遠く離れた人たちにメッセージを届けられないかと、いろいろチャレンジしています。



■チッソに学ぶ

ここから本題になっていくと思うのですが、今12年たってどう伝えていくかということが、非常に重要かと思っています。【書籍『チッソは私であった』緒方正人著の写真】緒方さんというのは水俣の活動家の方です。自身も水俣病を患っていました。最初はものすごく激しい活動家だったのですが、あるとき「チッソは私であった」と、神が下りてきたように考えが変わるわけですね。というのは、近代を生きてゆく中で、すべての人間には必ずチッソ的なものがあるんだと。暮らしの中でチッソ的なもの、いわゆる近代的なものと、どのように折り合いつけて生きていくのか、というものすごい問いなんです。でもこれは、僕らが原子力に関して厳しい見方をしている、僕らの中に必ず何か原子力的なものがある。その何か病巣みたいなものをどんどん明らかにしていくことで、新たな未来が見えるんじゃないか。彼のこの本というのは、思想に至るまでの苦悩などが描かれていて、おそらく福島の人たち、もっと広く言えば関東一帯、東京電力管内、さらに言えば日本ですよ、原発事故を起こした国として、将来これに対してどう向き合うべきかということの指針を書いた本で、非常に勉強になりました。

もう一人は、石牟礼道子さんです。『苦海浄土』という、文学とルポの間の狭間をゆく不思議と一言で片づけられないような。僕は高校生のとき、なぜ言葉を失ったのに水俣病の患者が石牟礼さんに喋ったのか、いろんな謎があったのですが、心で喋ったり、人間本来の持っている能力と言いますか、そういう気持ちのつながりだとか、そういったものが文学に昇華させてゆく。僕がやっているアートの戦術というのは、文学とすごく親和性があって、そういった形式で伝承は長く続いている。

緒方さんが最終的には「もやいなおし」という言葉を使いました。これは今私がやってる「もやい展」のロゴマークです。もやいというのはロープの結びを言います。舟でいわれる「もやい結び」という、非常に硬く締められる割にはほどくのも簡単。だから確立した個人がここぞというときに

力を結集して、最大限の力を出す。こういった国策が破綻した後に何が起きるか？

■分断という問題

この原発事故の後10年間、ずっといろいろ見えていますが、やはり分断というのが一番大きいんです。まずは賠償額によって地域をバラバラにする、地域を住める場所、住めない場所で区切ること、またそこで分断させていく。被災地と遠くの住んでいる人たちを分断させる。また最近では風評被害に新たに風評加害という。この問題をずっと分析してレポートを出している人が風評加害者という新しい言葉を作って、またそれで分断していく。それに対して反対の結びつきを強めていかないと、おそらく端切れ端切れにされて消えていってしまうのではないかと。そういったことも込めて、水俣の経験、そこから生まれた言葉などを最大限リスペクトさせてもらって、福島の展示に、「もやい」という言葉を使わせてもらっています。

「もやい展」は練馬区の美術館から始まって、金沢20世紀美術館、タワーホール船堀、あとは横浜のアートフォーラムというところなど、今まで4回行ってきました。とにかく誰でもずっと紛れ込まそうと。原発のことを前面に押し出してしまうと入ってこられない人がいらっしゃるので、できるだけ公の施設で人の流れに近い会場というのを搜して、さらに入場料という壁も無くしてしまおうということで、いろんな人に頭を下げてカンパをしてもらって、運営費を何とか賄ってゼロ円開催というのを続けてきました。ゼロ円開催なので、受付で、高校生の軍団とか見かけたら「ただだから見ていきなよ」、そういう風に連れ込んだ高校生の軍団が意外ときっちり見ていったとか。そういった突然の福島の表現との出会いというのが、小さな伝承に繋がっていくのじゃないかと、そういったことを願って活動を続けています。

■次世代への継承

さらに、震災10年たったあたりから次世代への継承ということがすごく大事だと思いました。震災の年に生まれた子が10歳で、その子たちには記憶がありません。前の世代の人たちが次の世代に

教えていかないと、おそらく福島事故の話というのは消えていく。昨年、郡山市の小学校で講演（授業）するという企画がありました。授業の直前に小学校の近辺のモニタリングポストの写真だとか、除染完了済みの看板だとか、通学路にあるような普段生徒たちが目にするような素材を写真に撮って、映像で説明したのですが、運動場に立っているモニタリングポストが何だかよくわかってない小学生がもうすでにいることにびっくりしました。わからない子が3分の2いました。それは世代間のコミュニケーションがうまくいってないからだと思いました。その子たちにはもう会わないかもしれないけれど、「今晚、お父さんお母さんに、あれは何なのかと聞いてください」という宿題を出しました。質問してもらうことで、お父さんお母さんの代と震災当時に生まれた子どもの間で、震災の事故当時の記憶が、ひょっとしたら受け渡されるかもしれない。そういった小さな作業が、この災いを後世に伝えていく。日本のどこかでまた起きてもらったら困るのですが、例えばいま世界で原発をまだやめない国など、それが本当は危険だからさっさと止めた方がいいんだよというようなメッセージを、未来につないでいける一つの力になるんじゃないかというふうに思っています。

去年「もやい NEXT」の展示を「アートフォーラムあざみ野」で開催しました。震災当時小学生や中学生だった人たちが一体どういう気持ちなのか、大人がよく狼狽する姿だとか、テレビの中で映し出される原発事故のことなど、自分の中にかみしめて、アート作品に昇華させていく、そういったものを実験的にやってみようということで、若手のアーティストを集めて開催しました。

ウクライナはチェルノブイリ原発事故の伝承にアートとして非常に力を入れたように感じます。これは「チェルノブイリ救援中部」さんから借りしたウクライナの子どもの学校で描いた絵。チェルノブイリの燃える赤い森を描いた絵ですが【3本の木と太陽】、この絵を見た瞬間に背筋が凍りました。この写真【3本の木と太陽】は請戸、浪江町、原発の北へ5キロぐらいの海岸の請戸の浜に取り残された枯れた木です。この三相の関わりと

いうのを僕はものすごく気になっていて、ここに太陽がシンクロする時期をずっと狙って、ようやく収めた1枚でした。絵は93年ぐらいに描かれたんですが、その絵の魂というのが、こう言うは大袈裟かもしれませんが、何だか福島の方にフラフラとやってきて、僕の写真と共感してしまったような。そういったちょっと時空を超えたメッセージのようなやり取りというのがアートの世界ではできる、とにかく次に伝わっていくと。絵を描いた男性は今40代ですので、戦争に行っているのではないかと非常に心配です。もし、この戦争が終わったら何とか彼を訪ねてチェルノブイリと福島の話をしてみたいと思っています。

同じくチェルノブイリ関係で去年呼んだのが、このガラスブロックの作品を作ったウクライナ人、マリコ・ジェルマンというアーティストです。彼女はチェルノブイリ原発事故の年に生まれました。子どもの頃から正体不明の倦怠感とかやる気のなさに苛まれて、甲状腺障害だとわかったのは20歳のときでした。それから甲状腺の治療をするようになりました。病院の壁というのがガラスブロックだったので、そのガラスブロックに自分の姿を投影したそうです。ここに入ってるのは全部、甲状腺ホルモンのチラーヂンです。それ（錠剤が入っていた空のパッケージ）をガラスブロックに封入した「トランスペアレンシー」というタイトルの作品です。トランスペアレンシー、つまり存在の透明性です。社会において原発事故による甲状腺障害を公にできない、いわゆる社会における透明な存在、それを明らかにしようと。

今、そのトランスペアレンシーと闘ってるのが「3.11 子ども甲状腺がん裁判」の原告の7人です。まだ顔は出せないのですが、5回まで開いてようやく意見陳述まで終わって、これからどう展開していくのか。原告のみんなに「フジロックフェスティバルのNGO ビレッジなどに出てみないか」などとちょっかいを出しているのですが、とにかく見せて伝えていくという、我々が今やっていることに、いつか彼女たち彼らたちも協力してもらえる時がくればいいなと思っています。そうなればマリコも喜んでくれるだろうと思います。

■おれたちの伝承館

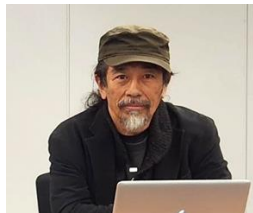
見せるということで、復興予算 57 億円を使って双葉町に作った伝承館。入ると、巨大ビジョンを見ながら上がっていき、スロープのところに書かれた年表というのは、原発が爆発してから、伝承館が出来上がった日で終わってしまう。それから先の歴史は無いわけです。伝承館が出来て復興は完了というイメージです。このスロープ、どこかで見たことあると思いました。これは長崎の原爆資料館です。長崎の原爆資料館は、地上 1 階から暗い地下に行きます。地下に同じようにらせん構造で行きます。ここには全部年表が刻まれていて、一番下の入口に着くときに 1945 年 8 月 9 日になる。それから、これは広島平和公園です。丹下健三建築。中心の軸にこの慰霊塔があって、その先に原爆ドームがあるという動線がきっちり組まれている。今できている双葉町の伝承館というのは、上にあがって希望の上昇と、また新しくやってきた明るい未来を見せるための施設だと。これができたとき、じゃあ本物を見せなきゃと、アーティストの仲間たちと「おれたちの伝承館」を作ろうぜ、と言うようになりました。それが南相馬市小高区の双葉屋旅館さんをはじめ、地元の人たちの協力で急遽実現することになりました。今年の開館を目指して今、小高と東京の二重生活をしています。小高駅から歩いて 5 分ほどのところに倉庫をお借りして頑張っています。なんとか 7 月の野馬追の前に開館できないかと考えています。入口には双葉町の伝承館の年表とは違い、これからの先どうなっていくかとどんどん書き込めるような年表作って、優しく対抗するという感じで、双葉町の伝承館に来てくれた人が「おれたちの伝承館」にも来てもらおうと。双葉町の伝承館で語り部をやっている人が、自分の語り部が終わったら、「ホントの面白いことは、北の小高の伝承館で喋りますからどうぞ来てください」という。そういった二つの方向からのものが学べるルートを作れないかというふうに思っています。学びの場として残すのが非常に大事だと思っています。倉庫内のイメージをいろいろ作っています。アーティストのみなさんは喜んでくれて、やる気が満々なのです

が、準備期間が半年しかないため、綱渡りの状態になっています。こういう場で言うのも非常に申し訳ないのですが、資金繰りに困っていますので、ぜひご支援をいただけるとありがたいなと思っています。

よく「無かったことにさせない」という合言葉のようなコールがありますが、今一番大事なのは、コンセンートの向こう側であったこと、今起きていることを自分の中で無かったことにしない、ということです。個人個人のその気持が、いつの日か絶対大きな一つのもやいになって社会を動かしたり、苦しんでいる人を救っていく、そういった力になれると思っています。それにアートは、次の世代にとって非常に沢山の窓口を開くことになるとと思いますので、僕らがやっている伝承活動もぜひ注視してこれからも応援してください。ありがとうございました。

※以上、当日の講演から一部省略してまとめました。

—*—*—*—*—*—*



中筋 純（なかすじ じゅん）
写真家。2007 年チェルノブイリ取材を開始。2011 年福島原発事故後は福島へ通い撮影を続ける。2016 年より「流転 福島&チェルノブイリ」展を

全国 40 か所で巡回。福島関連の表現を続ける芸術家たちの展覧会「もやい展」を主催。著書『流転チェルノブイリ』（二見書房）、『かさぶた The Silent Views 福島』（東邦出版）、『コンセンートの向こう側』（小学館）他多数。

★『おれたちの伝承館』

問：もやい展事務局 中筋、相原)

E-mail: 2021moyai@gmail.com

ゆうちょ間送金 記号 10190 番号 72657011

他行より ゆうちょ銀行 018 支店 普通 7265701

口座名義 もやい展実行委員会

チェルノブイリ事故から 37 年 ウクライナとベラルーシでは

<ウクライナ>

●今年の 4 月 26 日は珍しく静かでした。国家レベルでは環境大臣がチェルノブイリ原発を訪れ、石棺近くの記念碑に花を捧げました。基本的にはこの日は地方自治体レベルで記念集会在行われました。一方、キエフ（キーウ）では、クリチコ市長はこの日を全く無視しました。彼の父親はチェルノブイリ事故のリクビダートル（事故処理作業員）だったのですが、チェルノブイリの日に対するこのような冷ややかな態度というのは、次の二つのことが考えられます。ひとつは、ウクライナでは戒厳令のため、安全上の理由から大規模なイベントが禁止されているということ。もうひとつは、現政権の新しい世代の政治リーダーたちのチェルノブイリ事故に対する考えによるものではないかと私はみています。

（NGO「チェルノブイリの子どもたちの生存」
代表 ザクレフスキーさん）

●4 月 26 日はチェルノブイリ事故の追悼の日でした。私の住むキエフ市トロエシナ地区 ※の集会では今回ロシアとベラルーシの旗だけでなく、他のすべての旗もありませんでした。掲げてあったのはすべてウクライナの旗で、キエフの紋章、消防署の紋章、そして私が知らない何かの旗でした。その日の写真を送ります（下の 2 枚）。車の数に注目してください（写真右）。これらの車のほとんどは、式典のために公園に来たチェルノブイリ被害者たちです。助けが必要な人たちです。

（児童合唱団「チェルボナ・カリーナ」元団員のユーラさん。両親はチェルノブイリ原発元職員）

※旧ブリピャチ市からの事故避難民が多く暮らす地区。

●ジトーミル州・ベルディチウ（ベルジチェフ）市でもチェルノブイリ事故の記念集会在行されました。これは毎年リクビダートルの碑のある広場で行われます。市長や、存命のリクビダートルたちが参加しました。私たちの町からはとても多くの消防隊員が原子炉の消火活動に参加したのです。

（オーリヤさん。10 代の頃に甲状腺の手術を受け、子ども基金の保養プロジェクトに参加した。）

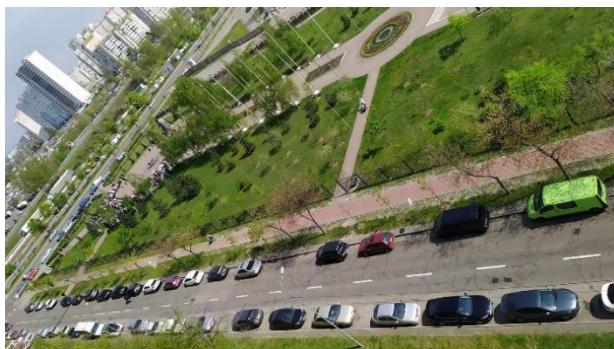


「彼らは世界を救った」
という文字の下に、リクビダートルたちの名前が刻まれている。

<ベラルーシ>

チェルノブイリ事故 37 周年の今年も、4 月 26 日に国内各地で集会が開かれました。ゴメリでも集会在行われ、追悼の碑に花が捧げられました。そこでは様々な言葉が語られましたが、実際のところは、子どもたちのために何をしてくれているのでしょうか？「子どもたちは健康です」とでもいうように、病気の子どものための障がい認定が取り消されています。これは大きな悲劇です。障がい児認定の取り消しで、公的支援が受けられなくなった子の親たちは悲嘆にんでいます。でもどうすることもできません…。

（ゴメリ州 V さん。病気の子どものを持つ母親）



「被災国ウクライナ・ベラルーシは今」

報告 小寺隆幸 (チェルノブイリ子ども基金共同代表)

日本ユーラシア協会（東京都世田谷区）を会場に、オンラインもあわせて 60 名の参加で行われました。最初に私が「戦禍で影響を受けたチェルノブイリ保養活動」について話しました。チェルノブイリ原発事故を知らない世代が増えていますので、まず事実を振り返り、今も IAEA などが被害を過小評価している中で二人の科学者の意見を紹介しました。

●「チェルノブイリの災害は数万人の死者に対して責任関係があったはずだ。いかなる「科学的」真実も、この単純な「人間的」真実にとってかわることはできない」（ジャン＝ピエール・デュピュイ 著『チェルノブイリ ある科学哲学者の怒り』明石書店）

●「チェルノブイリは、技術文明の発展が袋小路に向かっている問題を鋭く提示した。これは未来から私たちに向かって送られてきた警告である」（1991 年のウクライナ環境大臣シチェルバクの言葉。今中哲二編 報告書『チェルノブイリ原発事故の実相解明への多角的アプローチ』より）

そして今、昨年春のロシアの侵攻でチェルノブイリの被災者とその子どもたちは、やっと定住した地から再び避難を強いられています。それに対する子ども基金の取り組みについて、スウェーデンの団体との協力と「子どもたちの生存」を通じた支援活動について報告しました。キエフ（キーウ）の内分秘研究所やオブルチ、ナロジチの病院や学校などに行っている支援については基金ニュースに佐々木さんが詳しく記していますのでここでは割愛します。最後にウクライナで劣化ウラン弾が使われようとしている問題に触れました（後述）。

続いてオンラインで在日本ベラルーシ人の会のお二人が「ウクライナ侵攻の陰で続くベラルーシ独裁政権による弾圧」について話されました。ナジェヤさんは、政治犯を弁護する弁護士 600 名が資格を取り上げられ、ノーベル平和賞受賞者のビャリャツキ氏も 10 年の刑で服役していることなど、弾圧の実態を語られました。タッチャナさんは、ウクライナで戦うベラルーシ義勇兵が存在し、ウクライナの勝利でベラルーシにも民主主義が実現することを願っていると語られました。

最後にウクライナ研究会の國谷光司さんが「現地ウクライナを取材して～被災者支援活動の実態」と題して昨年 11 月に現地ボランティアと交流した様子を報告されました。ロシアの爆撃で破壊されたホストメリの小学校を再建した現地のグループを取材し、彼らの資金を支えるために在日ウクライナ人の団体と繋げたのです。「痒いところに手が届く」現地のボランティアが活動しやすいように支援することが大事だと訴えられました。



ウクライナの大地を 劣化ウラン弾で汚染させないで！

英国政府は 3 月 20 日、ウクライナに最新鋭戦車と共に劣化ウラン弾を送ると発表、4 月末にはそれがウクライナに届いており、今後のウクライナの反転攻勢で使われようとしています。ご存知だと思いますが湾岸戦争・イラク戦争・コソボ紛争などで米英は劣化ウラン弾を大量に使用し、その後イラクの子どもたちに白血病が多発しました。豊田直己さんら日本のジャーナリストがその実態を現地で調査し報道、国連環境計画も劣化ウラン弾が環境に重大な影響を及ぼすと警告し、ベルギーは劣化ウラン弾禁止の国内法を制定、EU 議会も使用禁止の決議を採択しています。劣化ウラン弾は戦車の装甲を貫通し破壊する強力な兵器ですが、その結果 α 線を出す放射性微粒子が飛散します。それを吸い込めば内部被曝し数年後に病気になりかねません。ロシアに勝つという目的であれ、住民に、とりわけ子どもたちに被害が及ぶ劣化ウラン弾を使用することは許されません。今『劣化ウラン弾に反対する市民ネットワーク』を立ち上げネット署名を集めています。上の見出しで検索すれば出てきますのでご協力をお願いします。

ベラルーシ 子ども健康回復センター「ナデジダ（希望）」

子どもセンター「ナデジダ」は、チェルノブイリ事故による放射能汚染地に暮らす子どもたちを対象とした保養施設です。子ども基金はこのセンターのパートナーとして、1994 年の開設当初から医療機器や医薬品、楽器、文具などを贈り、施設建設費用の一部を支援してきました。97 年から毎年夏に「ナデジダ」で病気の子どものための保養プロジェクトを行っています。今年 7 月にはチェルノブイリ被害者家族の保養、8 月には病気の子どものための保養が例年通り予定されています。チェルノブイリ事故 37 周年の行事や最近の様子をご紹介します。

4 月 26 日、「チェルノブイリ・私の国の痛み」と題する記念行事を行いました。保養中の子どもたち、教師、センターの職員、ドイツ側パートナーの NGO の人たちが参加しました。チェルノブイリ事故をテーマとした子どもたちの演劇やダンスも行われました。そしてチェルノブイリ事故により命を奪われた人々を偲んで追悼しました（写真最上段と 2 段目、表紙に掲載）。

「今この地球に住んでいる私たちに明らかなのは、地上の平和がいかに壊れやすいものであるかということです。ですから今、自分自身と友人、大切な人たち、地球上のすべての人々のために晴れ渡る空と安寧、未来への信頼、そして平和が訪れるよう祈りましょう」

またチェルノブイリ事故を学ぶための授業もあり、グループごとに話し合いも行われました。

同日、センターに隣接する夏の休養施設「ビリヤ」の新しい宿泊施設のオープニングも行われました。2 週間後には子どもたちがここで滞在するようになります。

5 月 6 日には、アスレチック公園「天国への階段」のシーズンも開幕しました。この日は快適な陽気で天気も良く、多くの子どもたちがロープを使ったさまざまなアスレチックを楽しみました（写真 3 段目と 4 段目）。

5 月 10 日にはセンターに、新たな子どもたちが保養のためにやって来ました。さらに夏季シーズンに向けて着々と準備を進めています。

ベラルーシはもう暖かくなっています。サクランボ、リンゴ、モモなどの花が咲いています。ミンスクの民族友好公園では桜の花が開花しました。

子ども基金の活動にいつも感謝と敬意を抱いています。みなさんのご健康と活動のご成功をお祈りします。

2023 年 5 月 17 日

「ナデジダ」広報担当 タチヤナ・M



ベラルーシからの便り

ウクライナでの戦争に関連して「ロシアの同盟国」と報じられ、日本を含め各国から経済制裁を受けるベラルーシですが、そこにはチェルノブイリ事故の影響を受け、さらに病気の子どもや家族を抱える人々が今も多く暮らしています。2020 年の大統領選挙とその後の大規模な抗議活動を受けて、ベラルーシ国内での市民活動や言論の自由は一層厳しい制限を課せられ、現地団体の活動も様々な制約を受けています。

子ども基金からの送金にも度々問題が生じており、団体宛の送金は何とか再開できたものの、現地での現金引き出しにも厳しいチェックがあるようで常に薄氷を踏む思いです。以下の二人の女性が所属していた甲状腺患者のための救援団体はすでに解散しているため、各個人宛に支援金を送っていましたが、経済制裁により昨年3月以降は送金が困難になっています。

* ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ *

◆今年に入ってから、私と子どもたちは頻繁に体調を崩しています。なぜこんなに風邪のような症状が長引くのかわかりません。私については最近ようやくよくなってきているところです。娘のアミーナ（10 歳）はほぼ毎週、学校を病欠しています。少し良くなったと思っていると、またすぐにぶり返す、ということがもう3カ月も続いています。息子のスタス（6 歳）も同じような状態です。子どもたちの父親（離婚している）はもう4年も子どもたちに会いに来ていないし、電話さえかけてきません。里親のYさんにくれぐれもお礼を伝えてください。ご支援にどれほど助けられたか、言葉にできないほど感謝しています。

マリーナ（38 歳）

（マリーナさんと息子のスタス君の写真は表紙に掲載）

◆やっと天気がよくなってきたので、外に散歩に行きたいと思っています。病院で娘のナースチャ（16 歳）にリハビリ治療を受けさせたかったのですが、また拒否されてしまいました。てんかんの症状のある子どもは受け入れられない、と言うのです。それで私が娘にマッサージをしています。送金については、このような状況では難しいということを理解しています。里親のSさんによりしく伝えてください。

ナターシャ（40 歳）



← ナースチャさん

→ 写真中央：2015 年に訪問した時のボグダン君と祖母。写真右：2022 年ナデジダでの保養の様子。

◆NGO「困難の中の子どもたちへ希望を」

代表 ワレンチーナさんから

「とても悪いお知らせです。ボグダンの祖母がリンパ腫（血液のがん）にかかり入院しました。ボグダンの世話をする家族がいなくなったため「家族の家」（孤児院）に引き取られました。成人する 18 歳まで、2 年半そこで暮らすことになります。本人は精神的に大きなショックを受けています」

~~~~~

ボグダン君（2007 年生まれ）は、6 歳のときに左腕の軟性組織の悪性腫瘍が見つかり、手術で腫瘍を切除しました。母親（1979 年生まれ）は脳腫瘍のため 30 歳で亡くなりました。未婚で出産したため父親はいません。母親の死後、祖母が親代わりをしていました。叔父（亡くなった母親の実弟、1981 年生まれ）は脳性麻痺で手足が不自由、障害者年金で暮らしています。子ども基金は 2015 年に家族を訪問、ニュースレター№.102（2015 年 10 月号）で報告をしています。2015 年～2018 年まで里親支援を受け、その後現在まで子ども基金の募金から支援を続けています。去年は子どもセンター「ナデジダ」の保養プロジェクトにも参加しました。今後、18 歳まで子ども基金の支援を続ける予定です。



## チェルノブイリの歌声 ～ 4/15 講演会参加者のみなさまから ～

★チェルノブイリ原発事故後に生まれた子どもたちにも甲状腺がんが多発していること、もっと多くの人に知ってほしいです。チェルノブイリで唯一、事故との因果関係が認められた小児甲状腺ガンさえも、日本では事故との因果関係を認めず、訴訟を起こさざるを得ないことに怒りを感じています。★写真の記録の力、特に定点観測と俯瞰撮影の持つ力を再認識しました。チェルノブイリ子ども基金が今も活動が続けていることに敬意を表します。戦争が続いていることで、子どもたちの放射線被害が忘れられがちです。★アートの世界からのメッセージなかなかいいですね。次の世代への継承、考えないといけないと思います。★原子力（事故）と芸術の結びつきが新鮮でした。★入口は楽しく、段々と核心をついていくという言葉通り、重苦しくなるテーマについて楽しく学べました。★ベラルーシとウクライナの放射能被害を受けた人々が今回のロシアのウクライナ侵攻にどれほどダメージを被っていることでしょう。チェルノブイリ子ども基金が引き続き地道な活動ができますように。★水俣病の緒方正人さんの言葉、石牟礼道子さんのお話が深く心に残りました。コンセントの向こう側で起きたことを自分自身が無かったことにしないこと。周りの人にも今日のお話を伝えていきます。★関心のない方にどうやって知ってもらえるのか。私も考えながら中筋さんの今後の活動を応援していきます。本日の講演、本当にたくさんを感じました。★今回もとてもタイムリーなよい講演会でした。私たちは決してチェルノブイリのことも福島のこととも忘れてはならない。そして現在も苦しんでいる被害者、被災者への支援を続けていかなければならないと改めて感じました。今後も二団体の尊い働きについて続けられていかれますようお願い申し上げます。★日々の生活の中でボンヤリと薄れてしまっていたチェルノブイリや福島、ウクライナの戦争を忘れてはいけないと強く思えた刺激のある企画でした。★カメラやドローンなどを駆使し写真で記録を残すことの大切さを実感した。国が 57 億もの税金をかけて作った伝承館も、原発事故をなかったことのようにしたい思惑を感じさせ怒りを覚える。またそれを人々が喜んで訪れることに悲しささえ感じる。「お

れたちの伝承館」期待しています。毎年この講演会を楽しみにしています。事故から年数がたっても消すことのできない事実は続きます。様々な形で、自分のこととして考え行動していくために大変ありがたい講演会です。★チェルノブイリ、福島について改めて自分に問う、よい時間になりました。イギリスのウクライナへの劣化ウラン弾供与、その先にあるものは？ど素人ながら、日本が戦争準備を始め、武器輸出を解禁したい今、六ヶ所再処理工場で劣化ウラン弾が作られないことを願います。★美しい画像に感動し、強いながら押し付けがましいところの無いメッセージに共感を覚えました。★地球の誕生 46 億年前から長いスパンで捉えたお話、太陽は核融合反応であるという視点、実に興味深かったです。息の長い支援を続けている主催者、後援者のみなさんに拍手を送ります。★原発事故を知らない世代が増え、まさにどう伝えていくのが課題の一つ。とても良い企画、講演会だったと思います。「原子力明るい未来のエネルギー」の標語の大沼氏が後悔し脱原発の活動をされているのにそれを勧めた先生たちはどうしているのかとの発言がとても印象に残りました。多くの方がサイレントマジョリティーからアクティビストになることが求められています。★ずっと福島を見つめ続け取材、発信、表現していただくことに、東北出身者として感謝しています。遠方からでも参加できるため今後もオンラインでの参加方法を併せて実施してほしい。★16 歳です。新聞でしか見てない事実を現実として生々しく捉えることが出来ました。ありがとうございました。★記録すること、継承の仕方を改めて考えました。伝え方、残し方を工夫していくヒントを頂きました。作品の写真にとっても惹きつけられました。★チェルノブイリ事故から東日本大震災、そして今まで活動を継続することは、本当に大変なことで、それを続けておられる子ども基金さんと中筋さんに心からの敬意と感謝を申し上げます。多くの人に響きにくい事柄ではあるのですが、それがやめる理由にはならず、一人一人に届くことが大事であると思いました。

「おれたちの伝承館」と、子ども基金の活動について多数の応援メッセージをいただきました。ありがとうございます。



## 募金・救援状況



### ●募金状況 2023年2月～2023年5月 (単位：円)

|         | 2月        | 3月        | 4月      | 5月      |
|---------|-----------|-----------|---------|---------|
| 募金件数    | 131       | 72        | 58      | 24      |
| 救援寄付金   | 956,459   | 478,770   | 176,240 | 151,100 |
| 保養費     | 75,000    | 55,500    | 32,000  | 102,000 |
| 里子支援    | 247,150   | 72,690    | 29,320  | 214,660 |
| ウクライナ支援 | 308,688   | 398,000   | 55,000  | 162,000 |
| ニュース購読費 | 64,000    | 43,000    | 30,000  | 12,000  |
| イベント賛同金 | 3,000     | 18,000    | 1,000   | 0       |
| 合 計     | 1,654,297 | 1,065,960 | 323,560 | 641,760 |

\*4月講演会の賛同金へのご協力、まことにありがとうございました。

### ●救援状況 2023年2月～2023年5月 (単位：円)

|                                    |           |
|------------------------------------|-----------|
| <ウクライナ>                            |           |
| ◎チェルノブイリの子どもたちの生存                  |           |
| 子どもたちの保養 滞在費・遠足代                   | 1,766,960 |
| 子どもたちの保養の交通費                       | 387,372   |
| ◎オウルチ市立病院                          |           |
| 医療用ライト                             | 263,684   |
| <ベラルーシ>                            |           |
| ◎困難の中の子どもたちへ希望を                    |           |
| 家族保養の交通費                           | 179,184   |
| 医薬品（甲状腺ホルモン剤、カルシウム剤）               | 1,094,516 |
| 運営費：通信費、家賃、スタッフ給料×4人（2023年1月～12月分） | 849,332   |
| ◎子どもリハビリ・健康回復センター「希望」              |           |
| 甲状腺手術を受けた親と子どもの保養費                 | 1,331,334 |
| 病気の子どもたちの保養費                       | 2,991,934 |

### 2023年版チェルノブイリ救援カレンダー 収益金 612,355 円

(5/31 現在)

収益はチェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援のために使わせていただきます。

★上記のうち 110,223 円を「未来の福島こども基金」を通して福島原発事故により被災した子どもたちへの支援といたしました。

★2023 年救援カレンダーを値下げしました。1 部 500 円（送料別）で販売しています（残僅か）。

#### ★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキョウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリ子ども基金

(3)三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

#### ♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

2 月 川和保育園 父母の会、奥中山教会、自治労日野職員組合、日本ユース協会、広島船越教会婦人会、原発井戸端会議・神奈川、株式会社山のハム工房ゴーバル、プーシェル・アキウ、音楽センター

3 月 松山古町教会 C.S、代々木上原教会 教会学校

4 月 リサイクルグループ カリーナ、川和保育園 原発の恐ろしさを知る会

★2023 年 2 月号ニュースレター p.12 掲載の「2022 年度決算報告書」収入の項目に一部間違いがございました。大変申し訳ございませんでした。下記に訂正いたします。尚、合計金額に変更はございません。

<誤>

救援一般 12,161,149 円

ウクライナ緊急支援 1,624,931 円

<正>

救援一般 9,461,149 円

ウクライナ緊急支援 4,324,931 円

#### ～みなさまからのメッセージ～

◆顔の見える支援をしていただいてご報告くださり、直接何もできない者としてはとてもありがたいです。ウクライナ国内でも保養を検討しているとのこと、実現することを祈っています。一刻も早く子どもたちに笑顔の毎日を取り戻してあげたいです。(大阪府 T さん) ◆政府はウクライナとロシアの戦争によるエネルギー危機を巧みに利用して、原発回帰にかじを切りました。国民が騙されないように、チェルノブイリと福島の事故を忘れないでいたいと思います。(東京都 U さん) ◆いつも会報をありがとうございます。チェルノブイリの声と皆様の言葉に励まされ感謝しています。(東京都 O さん)

# 事務局から

■ウクライナ支援「カテリーナ・コンサート」6月17日  
(土)14:00～／名古屋国際センター別棟ホール  
一般 1500 円・高校生以下 1000 円

●講演「チェルノブイリ救援・中部」河田昌東  
●活動報告「チェルノブイリ子ども基金」佐々木真理  
主催:カテリーナ・コンサート実行委員会、非核・平和  
を求める写真・絵画展事務局 Tel.090-4084-5468

■フォトジャーナリズム展三重 2023「フォトジャーナ  
リスト 豊田直巳／写真家 飛田晋秀」(講演会もあり)  
8月17日(木)～20日(日) 10:00～17:00／津リージョン  
プラザ3F 展示室／入場無料／主催:フォトジャーナ  
リズム展三重 Tel.080-5100-5448  
＊近隣地域の方へはチラシを同封しています。

## ■「基金ニュースレター」について

寄付をくださった方には、使途の報告としてニュースレ  
ターをお送りしています。また、ニュース購読費  
(2,000 円／年)も募っております。印刷・発送などの  
経費の残金は、募金として使わせていただきます。  
※ニュースレターは子ども基金のHP でもご覧いた  
だけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが  
事務局までご連絡をお願いいたします。  
※ニュース発送経費を節約し、なるべく多くのお金を  
子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思います。  
そのため長期間、募金・カレンダー購入などのお振り  
込みがない方へのニュース発送は停止とさせていただきます。  
事情をご理解いただけましたら幸いです。

## ■ボランティア募集

ニュース発送作業(年 3 回:2・6・10 月):お手伝い  
いただける方を募集します。次回は 10 月中旬の予定で  
す。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋  
駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※ボランティア参加ご希望の方は、前日までにメール  
かお電話でご連絡ください。電話は平日午前 10 時～  
午後 5 時。留守の場合は伝言をお願いします。

＊ ＊ ご協力いただいているみなさまへ ＊ ＊  
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知  
らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております  
事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべ  
ての方に郵便払込用紙をお送りしております。決し  
て募金を強要するものではありません。また、すで  
に通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦く  
ださい。

## 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文  
字がかすれて判読しづらい場合がございますの  
で、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ  
通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連  
絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送  
りします。振込用紙の該当欄に印をつけてくださ  
い。

「領収証」が必要な方へ  
郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認めら  
れる領収証です。大切に保管ください。別途領収  
証がご入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつ  
けてください。

## 【編集後記】

戦争が始まって 2 度目の春が過ぎました。新型コロナ  
対策の制限も多くが緩和され、身の回りでは初夏の街  
にかつての日常が戻りつつあります。一方、事務局の  
パソコンの前に座ると日々待っているのは、「爆撃」「撃  
墜」「死傷者」等々、悲しい言葉や恐ろしい言葉がいく  
つも並んだ現地からの連絡です。同じ空の下、遠く離  
れた地の一人一人の顔を思い浮かべて、ただその無  
事を祈ることしかできないことに時にもどかしさを覚え  
ます。彼の地にも平穏な日常が戻り、再会を喜びあえ  
る日の必ず来ることを今日も信じて待っています。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年 3 回(2・6・10 月)発行●

住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>



※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。